

公開講演会要旨

大仏背後の山 平安時代に築かれ、重源によって撤去された大仏背後の山は、従来、基二丈高四丈の小山と解されていたが、その築造期に行なわれた論争を記録した天長4年(827)の太政官牒の解読を正すことによって、築かれたのは小山ではなくて、もっと山であったことが判明する。かつ、論争に参加した人々は官人、僧侶、技術者に分類されるが、各人の地位や出自を考えてゆけば、意見の対立の根源が窺われる。ことに技術者については、造寺司以後にわかに登用された三嶋嶋継と、造東大寺司ゆかりの木工寮との対決として把握することが可能である。

築かれた山の具体的な姿は、「東大寺造立供養記等」、撤去時の記録をもとにして高さは6丈、広さはおそらく12丈と推定される。それを図と模型であらわすと、頂上は大仏の肩に及んで、周囲は大仏を三方から囲む程の大きさとなる。蓮華座も半分以上土中に入っていたことになる。現在蓮華座の後半分がかなりよく保存されているのは、このためではあるまいか。

山は大仏の破壊を防止する策であったが、必ずしも有効な手段ではなかったと思われる。なぜならば、斉衡2年(855)に大仏の頭が落下するという事件が起るが、それは山によってあまりに躯体部が固体された結果ではないかと考えられるからである。大仏背後の山は、文化財保護事業の先蹤ともいうべきであり、今日の我々に多くのことを教えている。(伊藤延男)

七六寺巡礼私記と十五大寺日記 20ページ参照。(T 稔)

南都の高僧像について 鎌倉時代の南都の高僧画像は、明瞭に、当時代における新・旧両画風の種々の様相を示すものとして、南都絵画史の上からも、またわが国の肖像画史の面からみても、注目される。旧派、とくに法相・三論教学の祖師画像においては、奈良・平安時代以来の鉄線描による、色調の明かるい画風を示す作例が多い。新派、とくに律教学の祖師画風および若干の華嚴教学の祖師画像においては、宋画の影響を受け、謹細な描線によって写貌し、色感の冷たい画風を示す作例がすくなくない。鎌倉時代の南都高僧像の展開は、南都教学の復興運動や戒律復興の運動と密接に関係しているが、この際、戒律復興が積極的に新しい宋代文化を受容し、たとえば四分律資持家の学説を受容したのもその一端であるが、祖師画の面でも謹細な写実を根底とした宋の祖師画の影響を、直接的に受けたのに対し、法相もしくは三論の教学復興は、もっぱら伝統復古の面がつよかった点に、その新旧の差異があらわれたとみられる。

しかし、この新・旧両派の折衷は、意外に早い時期におこなわれたようである。文永4年(1267)幸村筆の唐招提寺行基像は、奈良絵仏師の旧派と推定される画派の絵師による、宋画風の受容がみられる。以後、南北朝時代以後の南都高僧像は、基本的にこの折衷された画風の継承を中心とし、南都では新しい画風の展開はみられなくなる。(平田 寛)

十一面観音の信仰について 7・8世紀の仏教信仰のなかで、観音信仰の占める部分は極めて大きい。聖観音は暫くおくとしても十一面、不空羂索、千手など変化の観音に対する信仰が意外にさかんであったことは、文献、遺像の両面からいえる。これら三観音はこの時代の雑密教的信仰を示すものであるが、これらを受容した素地が官寺ではなく、むしろ優婆塞、優婆夷行者など在野の仏教者であった点が注目される。このことは、6世紀以来我国の仏教受容の一態容を示すものとして極めて興味深い。即ち仏教渡来以前の呪術的な信仰を、仏教信仰とすりかえる際当然想像される現世利益的果報を主とする庶民の受容の態容といえる。十一面観音像は7・8世紀の遺像として、現在法隆寺金堂壁画、法隆寺献納押出仏、那智山出土金銅仏、聖林寺像などが知られている。長谷寺本尊も、現在の像は天文7年(1538)の再興ではあるが、当初の像は8世紀初頭の造像であり、更に二月堂本尊はいまその姿を窺いえないが、天平勝宝4年(752)実忠和尚によって造頭されたものであるという。二月堂は実忠和尚の私寺として十一面懺悔のためにたてたものであるが、古来から若狭の水が二月堂の關伽井に通じているといわれている。両者の関係は、遠敷八幡神の献水の伝説以外に確たる説を聞かないが、古代以来中世までの近畿地方の十一面観音像造像地点(国宝、重要文化財に指定されているものに限った)を地図上におとすと、大和から甲賀、湖東、湖北を経て若狭に至るルートが出来る。著名な湖北の渡岸寺十一面観音像もこのルートの上ののりものである。このルートが大和から若狭へ進んだものか、その逆かは問題であるが、少なくとも若狭と二月堂とは十一面信仰において結ばれていたことが了解される。なおこれは今後の研究に待つべきであるが、法隆寺金堂の十一面観音像の壁画が金堂の東北隅に位置することである。東北は丑寅に当り、いわば鬼門である。二月堂も東大寺伽藍にとっては東北方に当る。このことは古代における十一面信仰の内容を示唆して興味深い。更に平城宮の東北方に法華寺があり、現在の著名な十一面観音像は宮の創始より時代が降るが、藤原宮の東北にも法花寺という村落名が残っている。これらを含めてさらに古代の十一面信仰について調査研究をつづけていきたいと考えている。

(松下降章)

薬師寺講堂三尊像の原所在についての検討 薬師寺講堂三尊像がいつ、どこから現講堂へ移入されたかについては従来明徴を欠き、漠然と現講堂が再建された幕末安政3年(1856)の入仏供養の頃が考えられていた。したがって現講堂移入直前の所在も、「薬師寺古記録抜萃」(寺誌叢書第4所収)等の限られた記録によって、間接的に同時西院弥勒堂が推測されているにすぎなかった。また同じ「古記録抜萃」は西院弥勒堂以前の所在を八条村薬師堂とし、さらに原所在を本薬師寺と伝えているため、この三尊の原所在をめぐって本薬師寺本尊説と植槻寺本尊説とが生じていた。

第1図 薬師寺講堂三尊像

公開講演会要旨

この講演では、従来の両説ともその依るべき文献が必ずしも信憑性の高いものではなく、いずれもお十分な説得力に欠けることを指摘し、さらに最近確認された薬師寺近世記録、日記類によって、安永9年(1780)における西院弥勒堂からの講堂跡移入をはじめ、天明3年(1783)、文政2年(1819)の修理などと、その後の沿革を明らかにした。また、新しく確認された沿革や移入の経緯から、従来の原所在説は白紙に帰して再検討されるべきことを指摘、さらに金堂三尊の江戸時代以来の西の京新錡説が、近世における現講堂三尊の講堂入仏と講堂再建の事情から派生したものであることにもふれて、講堂三尊の講堂移入をめぐる経緯や薬師寺論争における意義についても検討した。(長谷川 誠)

密教の鎮壇具 平安時代には密教が盛んになり、それとともに地鎮・鎮壇の儀法も密教の教義にもとづいて行われている。天台系の「阿婆縛抄」¹、「門葉記」、真言系の「四巻」²、「覚禪鈔」などにはこの具体例が多く記されている。また、寺院の修理工事等によっても、その実例が10ヶ所ほど発見されている。ひと口に密教による鎮壇具とは言っても、その埋納法や発見された遺物には場合によっていろいろなちがいが見受けられるが、天台系と真言系によって二大別することができる。

この二宗派による埋納法は、概ね次のようである。たとえば天台宗の場合、天喜4年(1056)2月15日から行なわれた一条院の供養の時には、予め掘られた穴の底に1枚の紙を敷き、その上に輪宝を置く。そして輪宝の中心に概を立て、錘で概の頭を1080返打ち叩く。次に五宝・五穀あるいは散供等を入れて埋める。真言宗では、長治2年(1105)10月に行われた祇園御堂の供養の際には、仏壇の下³の中央に五宝・五香・五葉・五穀などを納めた瓶を五色の糸でからげて埋め、概の鋒で三鈷輪宝の中央を貫いて堂の八方の廂の下に埋めている。概を埋める時には、錘で打たずに穴を深く掘って埋めるものとされている。

発掘調査などによって発見された実例を見てもこれらによく合致するものが多い。天台系のものとしては仁和寺・和歌山城から、真言系のものとしては石山寺多宝塔・興福寺大御堂^{註3}・金剛峯寺家康御霊屋などの調査によって発見されている。これらは、いずれもそれぞれの教義にもとづいて埋納されたものである。

第2図 興福寺大御堂鎮壇具出土状態

註 1 鎮壇具は金堂跡で発見されたが、金堂は天永4年(1113)焼失の後、保延元年再建時に埋納されたものと考えられている。仁和寺は真言宗御室派であるが、この時の供養は時の天台座主忠尋が導師を勤めている。

2 滋賀県教育委員会『国宝 石山寺多宝塔修理要録』(1961年3月)

3 興福寺『興福寺菩提院大御堂

(森 郁夫)